

平成17年度厚生労働科学研究費補助金

# 食品の安心・安全確保推進研究事業

健康保護を目的とした

食に関するリスクコミュニケーションのすすめ方に関する研究

主任研究者 丸井 英二

順天堂大学医学部公衆衛生学教室

平成 17 年度厚生労働科学研究費補助金(食品の安全性高度化推進研究事業)  
健康保護を目的とした食に関するリスクコミュニケーションのすすめ方に関する研究

リスクコミュニケーショントレーニングの試み

吉川肇子 (慶應義塾大学商学部助教授)

堀口逸子(順天堂大学医学部公衆衛生学教室)

**研究要旨**

リスクコミュニケーション研修会を実施した。参加者のリスクコミュニケーションの状況を把握し、研修会についての評価のために、質問紙調査を実施した。その結果、リスクコミュニケーションの重要性などの認識は非常に高い状況が伺えたが、資料が不足し、研修会への参加が十分でないなど課題が明らかとなった。今後は、資料を充実させ、研修を実施していく必要があると考えられた。

**A目的**

リスクコミュニケーションの研修を実施し今後の研修のあり方について明らかにする。

と回答したものが全体の約 90%であった。

リスクコミュニケーションに関する質問では、その重要性を認識していたが、研修会によって、その能力への自信については、参加前より自信がついたのは約 60%であった。今後の研鑽については、とても必要と思っているものが約 70%であった。現在の職場において、リスクコミュニケーションの理解は十分ではないと感じており(約 60%)、リスクコミュニケーションの工夫が必要(90%以上)と回答していた。また改善できる場所があると思ったものも同様であった。研修内容について、職場での共有の必要がありと思うものも約 90%であった。

**B対象及び方法**

平成17年10月に、リスクコミュニケーション研修を実施し、参加者へ質問紙調査を行った。リスクコミュニケーション研修は、食品の事故発生をシミュレーションしたものである。

リスクコミュニケーションの資料であるが、十分ある、まあまああるとしたものは全体の約 40%であった。またこれまでの研修会の参加経験に関しても、あると回答したものは約 30%に留まっていた。(資料参照)

**C結果**

分析対象は参加者のうち、質問紙に回答があったもの 41 名である。参加者はその職種についてから3年未満のものが全体の 2/3 強を占めていた。研修会は、レクチャーとグループワークからなっていたが、テーマ、レクチャー、グループワークのいずれも「良かった」と回答していた。特にグループワークの評価が高かった。理解度についても同様であった。次年度以降の研修の実施についても、参加したい

**D考察及び結論**

リスクコミュニケーションの重要性などは認識できていたが、職場での理解はまだすすんでおらず共有が必要としていた。しかし、未だ資料が不足していた。今後は、資料を充実させ、また研修を実施していくことが必要と考えられた。

#### E健康危険情報

なし。

#### F研究発表

なし。

#### G知的財産権の出願・登録状況

なし

## シミュレーション

### 「ポイズン・マウンテン」

#### 目的

シナリオ演習の目的は、全般に危機管理のさまざまな側面について話し合い、具体的には食物連鎖に対する深刻な脅威に備えをなすうえで、共通の地盤を設けることにあります。

このシミュレーションでは、問題分析、情報（インフォメーション）と諜報（インテリジェンス）、危機コミュニケーション、政策立案等、いくつかの課題分野に焦点を当てます。

#### 形式、役割、任務

参加者は、5人程度からなるグループに分けられます。それぞれのグループは、アワーランドと呼ばれるアジアの国の常任食物安全諮問委員会として行動します。同委員会は、首相自らが監督するトップレベルの省間危機管理チームの支援を要請されています。あなたのグループは、新たに展開する状況を把握し、分析結果と勧告を与えるよう求められています。不測事態の発生当初数時間には、よくあるように情報は不足しています。あなたがなすべき重要な任務は、現状を明確にし、潜在的な複雑化要因を先取りするとともに、代替策の潜在的費用と便益を評価する方法を見つける上で、政府を手助けすることです。

すべてのグループが同じ情報を受け取ります。入って来た情報は、画面に示されます。いくつかの状況報告またはメッセージを受けた後、各グループは、画面上に現れる質問に基づいて、首相向けのアドバイスを用意するよう求められます。各グループディスカッションには20分程度を割くことができます。4ラウンドのうち、それぞれが終了した時点で、各グループは、自分たちのアドバイスについて簡潔なプレゼンテーションを行うよう求められます（約5分）。このプレゼンテーションは、グループを代表してひとりのメンバーが行うものとします。そのため、各グループはそれぞれの状況報告を受けた話し合いの結果を文書に記録する代表者兼報告者を任命する必要があります。プレゼンテーションの後、ほかのグループは、その内容について論評することができます。

あなたには、この危機対策委員会のメンバーとして、シナリオを吟味する際に国家戦略的視点を保つことが期待されていることに留意してください。さらに、あなたは最重要意思決定を行う立場としてではなく、諮問委員としての立場で行動することになります。

がんばってください！

## ポイズン・マウンテン：シナリオ演習

### 背景

このシナリオは、アワーランドと呼ばれるアジアの想像上の国で発生します。アワーランドは、小規模で裕福な国です。同国は、正式な経済連合には属していませんが、近隣諸国との関係を極めて効果的に管理されてきました。アワーランドは、中道・右派連立政権によって運営されています。来年後半選挙を迎える首相は、酸性雨撲滅を標榜する若手の保護主義者として、70年代後半に政治の世界で最初に名をはせ、最終的には法と秩序の壇上で政権を握りました。彼は、同国南東部山間地（国境とハイリバーを、下流の隣国でASEANに属しているサンランドと共有している）の出身であり、この地域をハイキングやアドベンチャーツーリズムの旅行先としてプロモートしてきました。同地域はまた、食品生産にとっても重要な土地です。河川は漁業にとって重要であり、山間部の小川は、同国（ならびに世界におけるこの地域）の最も人気の高いビールの源であり、丘陵地は穀物の栽培や畜牛の放牧地としても利用されています。事実、ともすれば野暮ったいものの人気のある広告では、ハイリバーの牛の横で、首相がディナーテーブルに座り、同地域のトレードマークである柔らかい牛肉を食べている姿を映し出しています。ここしばらくの間、首相はUNESCOに対してロビー活動を行っており、ハイリバーバレー地域が来春、世界遺産として宣言されるという噂があります。首相の連立パートナー（工業大臣、農業大臣を含む）は、経済成長と福祉改革の推進の方に関心を示しています。アワーランドは、中東および対テロ戦争において、さまざまな国際的作戦に参加してきました。ただし、アワーランドの国民は、これまでこうしたミッションについては懐疑的でした。

あなたは、常設食品安全諮問委員会のメンバーです。同委員会は、首相自らが率いるトップレベルの省間危機管理チームの支援を要請されています。あなたのグループは出発点として、演習中に示される質問事項を用いて、これから展開される状況を把握し、分析結果と勧告を与えるよう求められています。各グループは、定期的にグループの所見をまとめるために代表者を選任する必要があります。

国営ラジオ  
**RadioTower.com** 午前9:00

本日のトップ記事:今朝早く、南東部の山岳密林地帯にあるオーストラリア人が所有するボデア山で、採鉱事故が発生。ハイリバーバレーを見下ろす高原の、いわゆる廃石ダムが崩壊。同鉱山は、200年以上にわたり操業されており、目障りかつ潜在的に環境・安全上有害として、論議的となっていた。同鉱山は、近隣のバーンビル村(人口12,000人)にとって、引き続き大規模雇用者兼文化的基盤となっている。

**CRISMART**

Crisis Management Research and Training

**CNN.com**

アワーランドのハイリバーバレーを見下ろす高原にある、いわゆる廃石ダムが今朝早く崩壊、同ダムには、抽出・精製工程からの副産物が収容されており、それが管理・調整されないまま放出されている。

**CRISMART**

Crisis Management Research and Training

National Radio  
**RadioTower.com**

最新情報

ボデア山施設に入る主要道路は、有毒性のスラッジ(汚泥)で覆われており、それが徐々に山腹を下に向かって拡がっている。

近辺でグループ旅行を引率していたボーイスカウトの隊長から、目撃報告を紹介する。

「このような状況は見たこともありません。廃物が至る所に散在しています。私のグループは悪臭を放つ泥まみれになっています。これが危険でなければと願うばかりです」。

**CRISMART**

Crisis Management Research and Training



ナショナルオブザーバーオンライン

最初の応答者が今や現場に到着し、ハイリバーバレーの被害を封じ込めようとしている。当初、現場では、土嚢やその他の重要な設備が不足していたものの、現在では主要な資源がヘリコプターとトラックで運び込まれている。

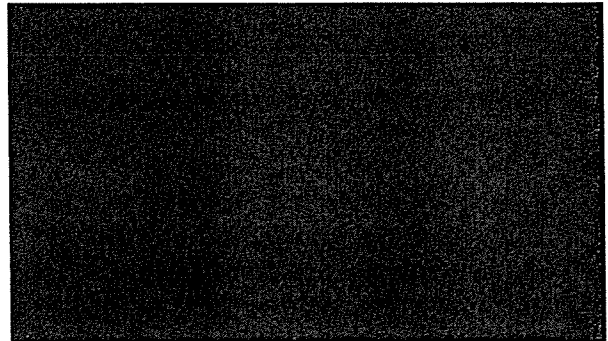
**CRISMART**

Crisis Management Research and Training



現地緊急時対応部門のスポークスマンは、高原  
区域から溢れ出たスラッジが、茶色の濁りとなって、  
今やハイリバーの川岸に達していると伝えている。

**CRISMART**  
Crisis Management Research and Training



**CRISMART**  
Crisis Management Research and Training





## バーンビル村長室

午後1:00

危機対策センターがすでに現地・地域レベルで設けられている。バーンビル村長は、今回の事故に対処する現地救助隊とポデリア鉱業社の手腕に対する自信を表明している。

**CRISMART**

Crisis Management Research and Training



## ポデリア鉱業株式会社

公開説明

ポデリア鉱業は、ハイリバーバレーダムにおける今回の事故を収拾するために、現時当局と協力しています。国民の皆さまにおかれましては、身の回りの環境が有毒物質の危険レベルにさらされることはありませんので、ご安心ください。

**CRISMART**

Crisis Management Research and Training



## 独立環境問題研究家フォーラム(FIE)

FIEの独立した専門家と環境問題研究家は、ポデリア鉱山における状況は收拾されているとした、ポデリア鉱業社と現地機関のレポートに対して懐疑的である。われわれは、今世紀最悪の環境災害を防ぐために、国レベルの大規模な介入を要求する。

**CRISMART**

Crisis Management Research and Training



## 緑の党

アイリーン・ライト、緑の党スポークスウーマン:

われわれはカチカチと音を立てる環境時限爆弾の中で暮らしている。わが国には、十分な安全対策を講じていない鉱山が少なくとも4箇所ある。従って、われわれは、ポデリア鉱山ならびにその他3箇所の類似した欠陥探鉱施設の閉鎖を要求する。

**CRISMART**

Crisis Management Research and Training



### ナショナル・オブザーバー オンライン

午後10:00

アワーランド人のトラックがサンランド国境で停止させられたという報道は、メディアの扇情的表現であったと暴露された。サンランド最大の新聞社のウェブサイトが本日早い時間に、でっち上げを報じたのである。今ではウェブサイトからすでに削除されている。同新聞社に秘密情報を提供した匿名筋は恐らく、冷却システムの問題でアワーランドに呼び戻されたトラックを見かけたのであろう。

**CRISMART**

Crisis Management Research and Training



### 医療科学研究所

毒物学部

毒物学部の研究者たちは、スラッジと洪水水からサンプルを採取済した。予備試験では、高濃度の有毒金属の存在が判明した。ただし、スラッジと水の化学的組成に関する公認情報を提出するには、さらなる追加試験が必要である。

**CRISMART**

Crisis Management Research and Training

### 国立災害緩和チーム指揮官からのレポート

考えられる選択肢はふたつある

- 1) 土嚢の積み上げとその他の小規模堤防の建設を通じて完全な封じ込めを回復する。汚染物質の流出を効果的に封じ込めるには何日もかかると思われる。
- 2) 有毒水とスラッジの流れを河川から迂回させる。これによってハイリバーの分水域は保護できるが、局地的影響が高まる可能性がある。唯一実行可能な分水には、地元牛肉・酪農業界が使用する放牧地の汚染が伴う。

**CRISMART**

Crisis Management Research and Training

**CRISMART**

Crisis Management Research and Training

## m マックスバーガー株式会社

プレスリリース、2日目、午前7:00

多国籍レストラン・ファーストフード企業であるマックスバーガー株式会社は、最高品質の牛肉を提供することを誇りにしています。ハイリバーバレーにおける昨日の災害を受けて、当社としては、今後ハイリバーバレーから牛肉を仕入れることはありません。ハイリバーバレー産牛肉の代わりに、ほかの地域の牛肉、およびオーストラリアから輸入した牛肉を使用します。

**CRISMART**

Crisis Management Research and Training

## ポデリア鉱業株式会社

公式声明

一部のメディアレポーターの発言内容とは異なり、ポデリア鉱山では施設における厳格な安全手順を遵守しています。最新の安全検査で、当社は適格証明書を取得しています。今回の事故は、ここ数ヶ月、施設に対する脅迫・強要の試みが多数あったことから、サボタージュが引き起こした結果ではないかと嫌疑をかけています。これについては地元警察に報告しましたが、残念ながら真剣に受け止められませんでした。

**CRISMART**

Crisis Management Research and Training

## The Online Comet

廃石ダムが決壊はサボタージュが原因であるとするレポートは、連邦鉱業検査局の技師が、廃石ダムの壊滅的崩壊については、ほかに特に明白な説明がつかないと発言したことから、本日新たな山場を迎えた。

**CRISMART**

Crisis Management Research and Training

## Sanland's Mission for the Environment

サンランド環境省 環境大臣の声明

サンランドの国民として、われわれは上流の隣国に大いに失望している。アワーランド政府が、そうした繊細な環境にあって、あまりにも国境の近くで、そのような危険な業務を認めていたという事実には憤りを感じている。また、サンランド政府は、今回の事故の公式発表が遅れたことについても納得をしていない。最初に私の目に留まったのは、メディアからのレポートであった。

**CRISMART**

Crisis Management Research and Training



ブルネイにて地域安全保障に関する会議を開会する一方で、ASEAN事務総長は、ハイリバーバレー鉱山災害について論評した。同氏は、廃石ダム崩壊の因果関係について、徹底的かつ多国間での調査に着手するよう要求した。

**CRISMART**

Crisis Management Research and Training

## 👁️ サウンドフード

アワーランド最大の食料品店企業であるサウンドフードは、ハイリバーバレー産の全製品の販売を停止する。サウンドフード社長は、現時点で売れ残っている製品は安全であるが、同社としては常に、消費者の信頼と安心を第一にしていると述べている。

**CRISMART**

Crisis Management Research and Training

## + 医療科学研究所 毒物学部

毒物学部で分析したスラッジと洪水水のサンプルは、高濃度の有毒重金属を示している。カドミウム、銅、鉛、亜鉛、ヒ素のレベルは、少なくとも推奨保健限度の10倍も高くなっている。

**CRISMART**

Crisis Management Research and Training

**CRISMART**

Crisis Management Research and Training



**CRiSMART Report:  
Training the Food Safety Section of the Japanese Ministry of Health, Labor and Welfare**

On October 13, 2005, Dr. Eric Stern, Director of CRiSMART, the Swedish Center for Crisis Management Research and Training at the Swedish National Defence College, and CRiSMART analyst Mr. Edward Deverell, carried out a training exercise for the Food Safety Section of the Ministry of Health, Labor and Welfare. The schedule entailed a one-hour lecture on the art of crisis management followed by approximately five hours of scenario exercises and debriefing sessions. The previous day a similar schedule had been presented for the Infectious Diseases section. However, the actual scenarios were different.

This report aims to give a brief account of the planning, executing and evaluating of the training of the Food Safety Section. First, however, we would like to express our gratitude to Dr. Kikkawa of Keio University and Dr. Horiguchi of Juntendo University for inviting us to Japan and to the Ministry of Health, Labor and Welfare for the financial support.

After a long trip, we arrived at Narita airport on the morning of October 7. We settled down at the Tokyo Dome Hotel (which by the way was first-rate) and made some preliminary plans for the week and for the upcoming meeting with Dr. Kikkawa.

The first meeting was held at Juntendo University on October 8. Dr. Stern, Mr. Deverell, and Dr. Kikkawa participated at the meeting. We presented the latest versions of Dr. Stern's address and the two scenarios. We then discussed in some detail how the scenarios should be altered to better apply to the Japanese context. The discussions continued at an informal lunch meeting at an excellent Japanese restaurant near the Tokyo Dome. After more helpful suggestions from Dr. Kikkawa, Dr. Stern and Mr. Deverell returned to the hotel to do some additional work on presentations and scenario exercises.

On October 9, a new meeting was held at Juntendo University. Dr. Stern and Mr. Deverell presented the new and updated versions of the address and the scenarios to Dr. Kikkawa and Dr. Horiguchi. Now some additional suggestions were made and we agreed on making the concluding amendments and handing in the finalized versions by the next day. Hence, Dr. Stern and Mr. Deverell continued to work with presentations and scenario exercises at the hotel on October 10. We corresponded with Dr. Kikkawa by e-mail during the day and the final versions of the presentations and the scenario exercises were sent to Dr. Kikkawa in the afternoon.



Stockholm, October 24, 2005

In the morning of October 11, Dr. Stern held a “power breakfast” speech for the Tokyo branch of SNS, the Swedish Center for Business and Policy Studies. Dr. Stern spoke of the changing context of crisis management and the work for the Ministry of Health, Labor and Welfare that CRiSMART were doing in Japan. After the breakfast meeting, Dr. Stern and Mr. Deverell met with the Swedish Ambassador to Japan and the Swedish Embassy staff. During the meeting, we talked about the cooperation between CRiSMART and Japanese researchers in general and the upcoming training that we were doing for the Ministry in particular.

October 12 was the first actual training day. Some 45 people, most of them from the Infectious Disease Section of the Ministry had come to experience the crisis management scenario exercise and Dr. Stern’s lecture. The second training day was structured much in accordance to the previous day. The main differences were that the group was a bit bigger. On the second day 65 persons participated. Most of them came from the Ministry’s Food Safety Section. The training day started with a lecture by Dr. Stern. He spoke about the challenge of crises and crisis management, the changing context of today’s crisis management, research and quality crisis management and educating crisis managers. After lunch Mr. Deverell presented an introduction and instruction to the scenario. More specifically, he talked about the purpose, format, and context of the exercise, and the roles of the participants. The exercise concerned an environmental accident that affected the food chain in a fictitious Asian country. The training session was divided into several parts. First the participants were divided into small groups of five or six. They were then handed several information briefings that appeared on a big screen for approximately two minutes. After each such section, which lasted about 10 minutes, the groups had twenty minutes for group deliberations about the scenario in general and potential choices of action and to answer specific questions regarding the chain of events. After the group discussions, at least two group spokespersons were asked to give a short presentation of their findings, suggestions and advice. Then Mr. Deverell and Dr. Stern gave some feedback and expressed their views on the working ways and advice that had been presented. There were four such rounds. After the last round, Dr. Stern summed up the discussions and gave his overall view of how the groups had dealt with the problems handed to them. After the scenario exercise, a dinner meeting was held to evaluate the training session. Participants were Dr. Kikkawa, Dr. Horiguchi, Dr. Stern and Mr. Deverell. More thorough evaluation also took place the following day at Juntendo University. At this time we also discussed possible joint future projects.

We would like to take this opportunity to thank the Ministry of Health, Labor and Welfare for making this visit and these training exercises possible. It was a really interesting experience to see how Japanese officials dealt with the problems that we presented to them. We are also pleased that the participants seemed to enjoy our scenarios



Stockholm, October 24, 2005

and the lessons that they entailed. We would also like to thank Dr. Kikkawa and Dr. Horiguchi for their great efforts to make our stay as pleasant as possible. Our hosts really took good care of us and we enjoyed our stay thoroughly.

Sincerely

Eric K. Stern and Edward C. Deverell

アンケート回答者41名の内訳はつぎのとおり

職種	在籍年数	人数
行政職	1年未満	8
	1年～3年未満	14
	3年～5年未満	1
	5年～10年未満	1
	10年以上	6
	計	30
研究職	1年未満	1
	1年～3年未満	2
	3年～5年未満	2
	5年～10年未満	
	10年以上	
	計	5
その他	1年未満	1
	1年～3年未満	1
	3年～5年未満	
	5年～10年未満	1
	10年以上	
	計	3
	不明(無記入)	3
	計	41



問1. 今日の会議をどのように感じましたか。

【①テーマ】

職種	在籍年数	良かった ←			→ 悪かった		無回答	総計
		1	2	3	4			
行政職	1年未満	3	4	1				8
	1年～3年未満	9	4	1				14
	3年～5年未満	1						1
	5年～10年未満	1						1
	10年以上	2	2	1		1		6
	計	16 (53.3%)	10 (33.3%)	3 (10.0%)	0 (0.0%)	1 (3.3%)		30 (100.0%)
研究職	1年未満	1						1
	1年～3年未満	1	1					2
	3年～5年未満	1				1		2
	5年～10年未満							
	10年以上							
	計	3 (60.0%)	1 (20.0%)	0 (0.0%)	0 (0.0%)	1 (20.0%)		5 (100.0%)
その他の	1年未満		1					1
	1年～3年未満		1					1
	3年～5年未満							
	5年～10年未満	1						1
	10年以上							
	計	1 (33.3%)	2 (66.7%)	0 (0.0%)	0 (0.0%)	0 (0.0%)		3 (100.0%)
	無回答	3 (100.0%)	0 (0.0%)	0 (0.0%)	0 (0.0%)	0 (0.0%)		3 (100.0%)
	計	23 (56.1%)	13 (31.7%)	3 (7.3%)	0 (0.0%)	2 (4.9%)		41 (100.0%)

問1. 今日の会議をどのように感じましたか。

【②レクチャー】

職種	在籍年数	良かった ←			→ 悪かった		無回答	総計
		1	2	3	4			
行 政 職	1年未満	4	3	1				8
	1年～3年未満	5	8	1				14
	3年～5年未満	1						1
	5年～10年未満	1						1
	10年以上	2	3				1	6
	計	13 (43.3%)	14 (46.7%)	2 (6.7%)	0 (0.0%)	1 (3.3%)		30 (100.0%)
研 究 職	1年未満	1						1
	1年～3年未満	1	1					2
	3年～5年未満			1			1	2
	5年～10年未満							
	10年以上							
	計	2 (40.0%)	1 (20.0%)	1 (20.0%)	0 (0.0%)	1 (20.0%)		5 (100.0%)
そ の 他	1年未満		1					1
	1年～3年未満		1					1
	3年～5年未満							
	5年～10年未満	1						1
	10年以上							
	計	1 (33.3%)	2 (66.7%)	0 (0.0%)	0 (0.0%)	0 (0.0%)		3 (100.0%)
	不明	3 (100.0%)	0 (0.0%)	0 (0.0%)	0 (0.0%)	0 (0.0%)		3 (100.0%)
	計	19 (46.3%)	17 (41.5%)	3 (7.3%)	0 (0.0%)	2 (4.9%)		41 (100.0%)

問1. 今日の会議をどのように感じましたか。

【③グループワーク】

職種	在籍年数	良かった ←		→ 悪かった		無回答	総計
		1	2	3	4		
行政職	1年未満	4	4				8
	1年～3年未満	9	4	1			14
	3年～5年未満	1					1
	5年～10年未満	1					1
	10年以上	3	2			1	6
	計	18 (60.0%)	10 (33.3%)	1 (3.3%)	0 (0.0%)	1 (3.3%)	30 (100.0%)
研究職	1年未満	1					1
	1年～3年未満	1				1	2
	3年～5年未満		1			1	2
	5年～10年未満						
	10年以上						
	計	2 (40.0%)	1 (20.0%)	0 (0.0%)	0 (0.0%)	2 (40.0%)	5 (100.0%)
その他	1年未満		1				1
	1年～3年未満	1					1
	3年～5年未満						
	5年～10年未満	1					1
	10年以上						
	計	2 (66.7%)	1 (33.3%)	0 (0.0%)	0 (0.0%)	0 (0.0%)	3 (100.0%)
	不明	3 (100.0%)	0 (0.0%)	0 (0.0%)	0 (0.0%)	0 (0.0%)	3 (100.0%)
	計	25 (61.0%)	12 (29.3%)	1 (2.4%)	0 (0.0%)	3 (7.3%)	41 (100.0%)

問2. あなたは会議の内容について理解することができましたか。

職種	在籍年数	十分できた	どちらかといえば できた	どちらかといえば できなかった	できなかった	無回答	総計
行政職	1年未満	2	5	1			8
	1年～3年未満	2	12				14
	3年～5年未満		1				1
	5年～10年未満	1					1
	10年以上	1	5				6
	計	6 (20.0%)	23 (76.7%)	1 (3.3%)	0 (0.0%)	0 (0.0%)	30 (100.0%)
研究職	1年未満		1				1
	1年～3年未満	1	1				2
	3年～5年未満	1				1	2
	5年～10年未満						
	10年以上						
	計	2 (40.0%)	2 (40.0%)	0 (0.0%)	0 (0.0%)	1 (20.0%)	5 (100.0%)
その他の	1年未満		1				1
	1年～3年未満		1				1
	3年～5年未満						
	5年～10年未満		1				1
	10年以上						
	計	0 (0.0%)	3 (100.0%)	0 (0.0%)	0 (0.0%)	0 (0.0%)	3 (100.0%)
	不明	0 (0.0%)	3 (100.0%)	0 (0.0%)	0 (0.0%)	0 (0.0%)	3 (100.0%)
	計	8 (19.5%)	31 (75.6%)	1 (2.4%)	0 (0.0%)	1 (2.4%)	41 (100.0%)